

「家の者全部がバプテスマを」

2005.6.12 赤羽聖書教会主日礼拝説教

16. 私たちが祈り場に行く途中、占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。
この女は占いをして、主人たちに多くの利益を得させている者であった。
17. 彼女はパウロと私たちのあとについて来て、
「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです。」と叫び続けた。
18. 幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り返ってその霊に、
「イエス・キリストの御名によって命じる。
この女から出て行け。」と言った。
すると即座に、霊は出て行った。
19. 彼女の主人たちは、もうける望みがなくなったのを見て、
パウロとシラスを捕え、役人たちに訴えるため広場へ引き立てて行った。
20. そして、ふたりを長官たちの前に引き出してこう言った。
「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、
21. ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。」
22. 群衆もふたりに反対して立ったので、長官たちは、ふたりの着物をはいでむちで打つように命じ、
23. 何度もむちで打たせてから、ふたりを牢に入れて、看守には厳重に番をするように命じた。
24. この命令を受けた看守は、ふたりを奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。
25. 真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。
26. ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖が解けてしまった。
27. 目をさました看守は、見ると、牢のとびらがあいているので、
囚人たちが逃げってしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。
28. そこでパウロは大声で、
「自害してはいけない。
私たちはみなここにいる。」と叫んだ。
29. 看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏した。
30. そして、ふたりを外に連れ出して
「先生がた。
救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言った。
31. ふたりは、
「主イエスを信じなさい。
そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。
32. そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った。
33. 看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。
そして、そのあとですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。
34. それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。

説教

今日は、後に坂島聖くんの幼児洗礼式を行います。

それで、幼児洗礼の意味を、今日のテキスト、使徒の働き 16 章から共に学びたいと思います。

マケドニアの叫びを聞いて、前人未踏のヨーロッパ伝道に足を踏み入れた使徒パウロは、最初の町ピリピで宣教し、その結果、そこで福音を受け入れた紫布商人ルデヤとその家族に洗礼を施します。そうして、ピリピで伝道を始めますが、そこへ「占いの霊に憑かれた若い女奴隷」に出会います。

「この女は占いをして、主人たちに多くの利益を得させている者であった。」（16 節後半）

とあります。今も占いが大流行です。テレビを見ると、朝から「今日の運勢は...」と血液型別に解説されます。カリスマ占い師の某というのが何人もテレビに登場し、人の人生相談をしております。それがまた儲かるようです。電話占いの場合、20分8000円で、10分超過ごとに2000円というわけですから、30分1万円になります。一日10人が30分間相談してきたら、一日10万円の儲けということになり、一ヶ月200万円以上儲けられる計算になります。大変な儲けです。

面白いのは、この占いの霊に取り憑かれた女奴隷は、使徒パウロとシラス、それに聖書記者ルカの後について来て、

**「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、
救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです。」**

と叫び続けたようです。しかも、来る日も来る日も、毎日、何日もこんなことをするので、パウロは「困り果てた」と言います。どうして困ったのでしょうか？実はこの「占いの霊に取り憑かれた女奴隷」と訳されている表現は、正確に詳しく訳すと、「神託を告げるギリシャのアポロンの神の霊に取り憑かれた女奴隷」の意味です。キリストの使徒パウロにとっては、ギリシャ神話のアポロン神の神託をもって、つまり言わばギリシャの神々の権威によってお墨付きの推薦をもらって宣教の後押しをしてもらおう必要など全くありません。たとえどんなに評価され、ほめられても、そんなものはむしろ邪魔なのです。宣教というものは、世の力によらず、人の能力にもよらず、ましてや世の神々、悪霊の力を借りて行うべきものではありません。人の力によらず、ただ純粹に、まことの神の力によって、すなわち聖霊の力によって成し遂げられなければなりません。それで、パウロは、振り向いて、**その霊に向かって、**

「イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け。」

と命じると、即座に霊が出て行きました。

しかし、これによって、女奴隷を食いものにして金儲けをしていた主人たちの恨みを買って投獄されます。鞭打たれ血まみれになり、足枷をはめられて、奥の牢に入れられたパウロとシラスは、苦しく不自由な獄中でも真夜中、「神に祈りつつ、讃美の歌を歌っていると」、何と、突然、大地震が起こって牢の扉が開き、囚人の鎖も解けてしまいます。慌てて目を覚ました看守は、囚人たちを逃がしてしまったと思い、そのままでは死刑に処されるため自害しようとしています。しかし、そこへパウロが大声で叫びます。

「自害してはならない。私たちはみなここにいる。」 28 節

この時、看守は、真っ暗な牢獄を照らす「灯りを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏した」のでした。この時、看守は、パウロたちがどういうかどで投獄されたかを当然知っていました。それで、おそらく、占いの霊に取り憑かれた女奴隷がパウロの後についてピリピの町中にふれ回った言葉も知っていたと思われます。「この人たちは、いと高き神のしもべたち」で、「救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たち」です。「えー、ほんとかよ?」、あるいは「そんなもんか」と全く本気にしてはいなかったでしょうが、まさかそのふたりが投獄されるや、いきなり大地震が起こって、彼らを閉じこめていた牢の扉が全部開いてしまうなどとは、全く夢にも思わなかったことでしょう。しかも、彼らは、枷が外され、出獄できても、逃げる気配がないばかりか、自分たちを監禁している看守に復讐するでもない、むしろ、看守のいのちを気遣って、「自害してはならない。」と看守のいのちを救ってくれたのです。この時、看守は、初めて占い奴隷が毎日町で叫んでいた

「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです。」

という言葉思い知ったことでしょう。それで、神々しい畏れに打たれた看守は、「いと高き神のしもべ」(16:17)パウロたちに、「救いの道」を請い求めます。

「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」

使徒パウロとシラスは答えます。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」

「先生がた」の直訳は「主よ」です。この「主」という言葉は、ローマの皇帝にも神々にも使われる称号で、看守がパウロとシラスを「いと高き神のしもべ」と認め、100%全幅の信頼を寄せて、ローマの皇帝、あるいは神々なみの尊敬を抱いていることを意味します。

「主よ。救われるためには、何をしなければなりませんか。」

「主 イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」

「あなたは私を『主』と呼ぶが、あなたのまことの『主』はイエスさまだ、そのイエスさまを主と信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」それで、パウロは、看守とその家の者全員に神のことばを語ります。(32節)そして、看守は、パウロとシラスのふたりを引き取り、血まみれのからだを洗い、その水で、看守とその家の者全員がバプテスマを受けたのでした。そして、ふたりを自宅に招待して食事をもてなし、全家族そろって神さまを信じたことを、心から(直訳は「この上なく、最高度に」の意味)喜んだのでした。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」

31節

イエスさまを信じる者には、永遠のいのちが与えられます。この天地を造られた神さまは、私たち人間をも造ってくださいました。私たちを生かし、神と共に世界に仕える最高の人生を与えてくださいました。人は、もともと、死ぬことなく、エデンの園という楽園で、永遠に神と人とを愛して生きる、最高の人生を生きていました。すべては神さまの恵みによることです。しかし、人は、神さ

まの恩に報いることなく、むしろ神さまに背きます。人は、自らが神にならんと、反旗を翻したのです。それで人は樂園を追放されました。死ぬようになってしまいました。「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができ」（ロマ 3:23）ないとみことばにある通り、人はそのままでは神さまの怒りを受けて滅びる以外になく、天国どころか地獄に投げ入れられて当然の者と成り果てたのです。しかし、神さまは、こんな私たちを見捨てることなく、御子イエスさまをこの世に遣わしてくださいました。そして、御子イエスさまを私たちの身代わりに十字架につけて私たちの罪を贖い、イエスさまを信じるすべての者に、永遠のいのちを与えてくださったのです。その永遠のいのちとは、死んでもよみがえるいのちです。最後の審判の日にもさばかれないいのちです。最後の審判に於いて、罪をすべて清算された後の、新天新地のいのちです。イエスさまを信じる者に与えてくださる永遠のいのちとは、イエスさまが生けるまことの小羊となって、私たちの罪の罰を身代わりに受けて下さり、私たちの罪に対する神さまのすべての怒りと呪いをすべて完全に清算して下さった後の、もう二度とさばかれることのない、さばかれる必要もない、新天新地のいのちです。天国のいのちです。だから、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたは救われる」との使徒のことばのように、イエスさまを信じる者は、もう神さまにさばかれることはありません。地獄に行くことはありません。なぜなら、イエスさまが、その人の身代わりに十字架に架かって、神のすべての怒りと呪いを受けて下さったからです。神さまに見捨てられて下さったからです。地獄の苦しみを受けて下さったからです。

それで、イエスさまを信じる者は、たとえ死んでも天国に行くことができます。誰でも主イエスを信じる者は、救われるのです。

「主イエスを信じなさい。

そうすれば、

あなたも、

あなたの家族も救われます。」

今朝、特に注目すべき点は、使徒たちが、イエスさまを信じる者は、その者が救われるにとどまらずに、その人の家族も救われると断言している点です。思うに、家族の救い、とりわけ子孫の救いの約束というものは、この使徒たちの時代から遡ること、およそ二千年前のアブラハムの時代（BC.2000年 = 今から数えて四千年前）からすでに約束されていたものでした。神さまは、信仰の父アブラハムに、

「わたしは、わたしの契約を、

わたしとあなたとの間に、

そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。」

と約束なさいました。

「わたしが あなたの神、あなたの後の子孫の神となる」

と宣言なさいました（創世記 17:7）。

それで、契約のしるしとして、イスラエルの男子は 生れて八日目に 全員「割礼」を受けたのです。「割礼」とは、男子の性器の包皮を切り取る儀式です。それは、人間が最も誤ちを犯しやすい性器の肉を切り取って、神さまに聖別する、つまり神さまのものと

して取り分ける、あるいは捧げる儀式といえます。それは、古い自分（すなわち『肉』）を脱ぎ捨てて、新しく神と共に生きることを意味します。

具体的に、「割礼」に込められた神さまの約束は、最も大雑把に言えば、自分の救いと、子孫の救いです。すなわち、「神の国への入国」と、「子孫の祝福」です。割礼を受けた自分自身が神の民となり、自分の身から生れる自分の子孫も神の民となる、ということです。

この旧約時代の「割礼」は、イエスさまの到来と共に「洗礼」に取って代わります。それで、パウロは、「洗礼」のことを「キリストの割礼」（コロサイ 2:11）と呼びました。すでにお話ししましたが、「洗礼」とは水で洗う儀式のことです。どんなに泥だらけでも、水で洗えばきれいになります。

それと同じように、神さまに対する自分の罪責も、神の御子イエスさまの十字架で流された血によって洗い流されてきれいになった、罪の贖いの恵みを、自分の目で見て、耳で聞いて、この手に触れて、生々しく体験することのできる儀式、それが洗礼です。洗礼の儀式は、父・御子・御霊の三位一体の神の名によって授けますが、それは、あたかも、三位一体の神ご自身が私たちの身に直接水を振りかけながら、言葉だけでは到底信じ切れないほどの恵みである、罪の贖いと赦し、永遠のいのちの恵みを、これを見なさい、これこの通り、お前が今、目で見て、耳で聞いて、その身に水を振りかけられて、体験しているように、お前の罪も、イエスキリストの十字架の血によってすべて完全に贖われてきれいになったのだと、これでもか、これでもかと言わんばかりに、罪の赦しの恵みを私たちに体験させてくださるものです。小さい子供にもわかる、誰の目にも明らかにわかるように示して下さる、神さまの恵みの補助手段なんです。

ですから、「洗礼」とは、私たちの罪が贖われて天国に入ることができるというしるしです。それは、救われた証しです。神さまとの契約のしるしです。このことから、「洗礼」に込められた神さまの約束は、「割礼」同様に、最も大雑把に言えば、まず自分の救いということです。そして、実は、これまた「割礼」同様に、子孫の救い、ということです。すなわち、「神の国への入国」と、「子孫の祝福」です。割礼を受けた自分自身が神の民となり、自分の身から生れる自分の子孫も神の民となる、ということです。

使徒ペテロは、イエスさまの御霊が弟子たちの上に降ってキリスト教会が誕生した日の最初の説教に於いて、神の救いの「約束は、あなたがたと、その子どもたち...に与えられている」（使徒 2:39）と説教しました。

「兄弟たち。

私たちはどうしたらよいでしょうか。」

「悔い改めなさい。

そして、それぞれ罪を赦していただくために、

イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。

そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。

なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち.....に与えられているからです。」

「子孫の救い」という旧約時代の約束は、二千年前のイエスさまの到来によって消滅してしまっただけではありません。そうではなく、

むしろイエスさまの到来によってむしろ成就しました。なぜなら、イエスさまは「律法を廃棄しに来られたのではなく、成就するために来られた」からです（マタイ 5:17）。ですから、イエスさまを信じる者は、実に、その子孫さえも、すでに神さまの救いの恵みの中に選ばれているのです。「子々孫々千代に至る」救いと祝福が約束されています。それで、イエスさまは、誰の目にもわかるようにと、このことを行動によって示してくださいました。信者が、自分の子供をイエスさまに祝福してもらおうと、イエスさまのところに連れて来た時、弟子たちは、「どけ、どけ、ここは子供の来るような所ではない、およびじゃない」とばかりに子どもたちを押しつけたのに対して、でも、イエスさまは、そういう弟子たちの方を叱りつけ、「**子どもたちをわたしのところに來させなさい。止めてはいけません。**」と諭されて、信者の幼い子供たちをみもとに引き寄せ、抱き上げ、彼らの上に手を置いて祝福し、はっきりと彼らの救いを宣言なさいました。

「神の国は、このような者たちのものです。」（マルコ 10:13-16）

このことは、信者の子どもたちも、天国に入ることができることをハッキリと示すことです。天国の主人は、イエスさまです。イエスさまは御国の王です。神の国は、イエスさまがそこにおられるから、神の国です。イエスさまが神の国の中心です。イエスさま中心に神の国、天国が回り、この天地宇宙も回っています。イエスさまは「王の王、主の主」です。その神の国の王であられるイエスさまが、信者の子どもたちをみもとに引き寄せられたのです。そして、彼らを抱き上げられました。のみならず、彼らの上にご自身の手を置いて、何と、祝福なされたのです。もしも子どもたちが天国に入れないのだとしたら、イエスさまが祝福なさることは全く意味がありません。イエスさまが祝福なされたのに、子どもたちが死んで地獄に落とされて永遠の滅びに投げ入れられるということは、全く考えがたいことです。そんなことは、ありえないことです。なぜなら、聖書で言うところの「祝福」とは、私たちが考える所の「御利益」とは全く異なる概念だからです。旧約聖書で言う所の「祝福」とは、申命記 28 章にズラズラとリストが挙げられているように、「呪い」と対比されるものです。そこには、神に従えば祝福が、神の背けば呪いが、とある通り、「祝福」とは、私たちが神さまに受け入れられて、神さまに喜ばれて、初めて受けることができるものです。だから、罪深い私たちは、何らかの落とし前をつけて神と和解しなければ、神さまから「祝福」を受けることなど絶対にできません。それは、もっと言えば、神さまに罪を贖われ、赦されて、受け入れられて、天国に入る者とされなければ、受けることができないものです。神さまに受け入れられないのに、天国には入れないのに、神さまから祝福を受けるということはあり得ません。たとえ百歩譲って、万が一そうあり得たと仮定しても、そんなものは祝福とは言えません。それは単なるこの世で言うところの「御利益」です。「現世利益」です。「祝福」ではありません。「祝福」とは、神さまに受け入れられて、天国に入ることができる、その前提の上で、初めて受けることができるものです。

だから、イエスさまが、子どもたちを受け入れ、わざわざみもとに引き寄せ、彼らの上に手を置いて祝福されたというこの事実は、彼ら、すなわち（自分の子どもをイエスさまに祝福してもらいたいと思って連れて来た）信者の子どもたちが、すでに天国に入ることができるものとして、イエスさまに特別に選ばれていることを強烈に印象づけるものといえるのです。そして、このことを裏付けるように、イエスさまは宣言なされたのです。

「神の国は、このような者たちのものです。」

こういう旧約聖書、さらにはイエスさまのみことばによる確約を背景として、使徒たちは、看守に確信持ってこう宣教したのです。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」

それは、神さまの約束に基づきます。使徒たちが宣教したように、主イエスを信じれば、あなたも、あなたの家族も救われるのです。

ここに今日授ける幼児洗礼の根拠があります。それは、神の約束、イエスさまの確約に基づくものです。ですから、私たちは、この神さまの約束を信じて、自分の子供に幼児洗礼を授けるのです。

それで、自分の子供に幼児洗礼を授ける親は、自分の子供が神の子であるという**前提で**、一生懸命に信仰教育しなければなりません。毎日一緒に聖書を読んで、申命記6章にある通りに、子どもたちによく教えなければなりません。きちんと神さまの約束を信じないと、そして、神さまのみことば通りに教えないと、(ただ形だけ幼児洗礼をしても)親も子どもも神さまにさばかれます。信仰によって、育てなければなりません。神さまの約束を信じる信仰によって、育てなければなりません。

自分を見ていたら、救いがありません。自分は救われているのかどうか、自分の行いを見ていたら、誰も救われません。ルターは、幼児洗礼に関して、「自分みたいな罪深い者が自分を見ていたら、滅びしかない。しかし、生れる前からの神の選びのしるしがあればこそ、何度でも立ち上がることができるのだ。」と言いました。

神の救いの約束、そして救いの約束のしるしである洗礼、幼児洗礼という神の救いの恵みのしるしを見つめながら、神の選びの恵みを堅く信じつつ、生きる、あるいは子育てをするのです。子育ても、信仰によって育てるのです。神さまの約束は必ず成就する、神さまが一度口に出して約束なさったことは、どんなことがあっても必ず実現する、イエスさまが一度救おうと定めたら、何が何でも絶対に救われる、そう堅く信じて子育てをするんです。そうでなければ、「なぜ疑うのか。信仰の薄い者だ。」とイエスさまに叱られます。

子どもは神の子である、という前提で育てるんです。私は、幼児洗礼に強硬に反対するバプテスト派の牧師と議論したことがあります。その牧師は、幼児洗礼を、まるで悪魔の儀式であるかのように話すので、あまりに腹が立って言いました。「先生のお子さんは洗礼を受けていますか?」「いえ、まだ受けていません。」「それなら、先生の子どもさんたちは、神の子ですか?悪魔の子ですか?」「いや、それは……」「今死んだら、天国に行けますか?あるいは地獄に行きますか?」「……」その牧師は、その時、何も答えませんでした。その牧師の理論を忠実に展開するならば、洗礼を受けていないその子供たちは悪魔の子となり、死んだら地獄に行くこととなります。しかし、さすがにそうは言いたくないらしく、何も答えませんでした。

彼らの言い分によれば、信仰告白がいのちなので、信仰告白していない、あるいは信仰告白できないほど幼い幼児は、みんな一人残らず救われずに地獄行きということになります。だから、まだよく話せないような一歳、二歳の子供に、必死になって信仰告白させようとしています。極端なのは、胎児に向かってまじめに罪の悔い改めを迫っている牧師までいます。そして、二歳の子供に悔い改めを促すことに成功したとか、今は一切の子供にチャレンジしているとか、全く異常な努力に明け暮れています。こんな馬鹿げたことを、同じ同労者の牧師がまじめにやっていることに、私は本当に心を痛めています。幼気な一歳、二歳の幼児が、厳つい顔した牧師に「お前は罪人だ。悔い改めろ。」と迫られたら、誰だって怖くて泣いてしまうに違いありません。そして、無理矢理泣かせて信仰告白させて、それで救われたと勘違いしているとすれば、これは恐ろしい倒錯としか言いようがありません。このようなことは、神さまの約束を無視して、人間の信仰告白を誤って絶対視しているから起こるのです。

イエスさまを信じるすべての者は救われておりますが、信者の子どもも実はみな救われているのです。私たちがイエスさまを信じる時、私たちの子どもたちも救われています。神さまの救いの恵みに選ばれております。そういう前提で、子どもを評価してあげて、正しく育てなければなりません。子どもも救われているんです。神さまに選ばれているんです。それが約束です。神さまの恵みは、私たちの思いや感覚を超えて、大きいのです。神さまの恵みに感謝しましょう。

「主イエスを信じなさい。 そうすれば、あなたも、あなたの家族も救われます。」

ここに集うみなさん一人一人が、神さまの約束を信じて、その約束の祝福を受けて、御名をあげることができるよう、主の御名により祈ります。